グループホーム うきうき

認知症高齢者グループホーム外部評価結果

番号	項　　目	良くできている	できている	努力が必要	評価困難
1	○理念の具体化 サービス理念や運営方針は、家庭的な環境の中で、利用者の能力や尊厳を尊重したケアを行うなど、グループホームの特徴を生かしたものになっている。	○			
2	○理念の共有と実現 すべての職員が、ホームの理念にもとづき、常にその実現に取り組んでいる。	○			
3	○グループホームでの生活空間づくりの工夫 病院を改装しているため「住み慣れた家」の雰囲気はないが、裏庭の日当たりの良い一画は畑として、季節ごとの野菜が栽培され、手入れも行き届いている。 病室としての名残りを残しながらも、各階段入り口の門扉、壁紙、床面の張り替え、畳コーナーを設えるなどの工夫がなされている。				
4	○気軽に入れる雰囲気づくり 入居者や家族が入りやすい、近隣の住民も訪ねやすいなど、玄関まわりや建物の周囲が違和感や威圧感を感じさせないつくりになっている。		○		
5	○家庭的な雰囲気づくり 共用の生活空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレなど）をはじめ、調度品や設備、物品や装飾が家庭的な雰囲気になっている。		○		
6	○くつろげる場所の確保 居室以外に、自由に過ごせるような居場所がある。		○		
7	○居室の環境づくり 居室は、入居者一人ひとりの生活にあわせ、使い慣れた家具や生活用品、装飾品等が持ち込まれるなど、安心して過ごせる場所となっている。		○		
8	○入居者の身体機能の低下を補うことに配慮した環境及び生活空間づくり		○		
9	○認知症に配慮した環境づくり 場所の間違いなどの混乱を防ぐための工夫がしてある。		○		
10	○落ち着いた暮らしができる快適な環境づくり 入居者が落ち着いて快適に暮らせるように、音の大きさ、光の強さ、におい、冷暖房などに配慮してある。		○		
11	○入居者に対するケアを行ううえで工夫されていること 「笑顔に満ちた生活の基本は身体の健康を維持することである」という考えのもと、身体管理には看護職の専門性が発揮されている。毎日の申し送り、異常の早期発見、ホームドクターとの連携体制は認知症の病状の悪化や重症化の予防に繋がっている。平均年齢が88歳と高く、身体能力の低下も著しいことから、全員で行うレク体操、拘縮のある方への関節可動域訓練は、主に看護職の働きかけで、ＡＤＬ(日常生活動作)の向上を図るよう努力している。				
12	○個別・具体的な介護計画の作成 アセスメント（評価）に基づいて、入居者一人ひとりの状況に応じた具体的な介護計画を作成するとともに、その計画の内容について入居者や家族に説明している。	○			
13	○介護計画への理解と実践 すべての職員が入居者一人ひとりの介護計画を理解し、その介護計画に沿ったケアを行っている。	○			
14	○職員間での情報の共有 職員間での申し送りや情報伝達を確実に行っている。また、重要事項について、すべての職員に伝わる仕組みがある。	○			
15	○入居者一人ひとりの尊重 常に入居者一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーに配慮した言葉かけや対応を行っている。	○			
16	○職員の穏やかな態度 職員の態度がゆったりしており、入居者への言葉かけなど、やさしい雰囲気で接している。		○		

評価者：(財)総合健康推進財団

グループホーム うきうき

認知症高齢者グループホーム外部評価結果

番号	項　　目	良くできている	できている	努力が必要	評価困難
17	○入居者のペースの尊重 ホーム側の決まりや都合で業務を進めていくのではなく、入居者が自分のペースを保ちながら暮らせるように支えている。		○		
18	○入居者の意志の尊重 入居者一人ひとりが自分で決めたり希望を表したりすることを大切にしている。		○		
19	○自立への配慮 入居者の「できること、できそうなこと」について、できるだけ手や口を出さずに、見守ったり一緒に行うようにしている。		○		
20	○身体拘束のないケアの実践 すべての職員が、身体拘束についての正しい理解のもと、身体拘束をしないケアを実践している。		○		
21	○入居者と共同した食事の支度と後かたづけ 献立づくり、買い物、調理や後かたづけなどについて入居者と共同して行う工夫をしている。		○		
22	○入居者一人ひとりにあわせた調理方法・盛り付けの工夫 入居者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や、便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理をしているかどうか。また、盛り付けの工夫等を行っている。		○		
23	○家庭的雰囲気の食事支援 職員が入居者と同じ食事を楽しみながら、食べこぼし等に対する支援・介助をさりげなく行っている。		○		
24	○一人ひとりに応じた排泄支援 おむつをできる限り使用しないで済むように、入居者一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレでの排泄や自立した排泄へ向けた支援を行っている。		○		
25	○排泄時の不安や羞恥心等への配慮 排泄の誘導や介助、失禁などへの対応は、入居者の不安や羞恥心、プライバシーに配慮して行っている。		○		
26	○希望に合わせた入浴の支援 入居者が自分の希望に合わせて入浴できるように支援している。		○		
27	○希望に合わせた理美容院への利用支援 入居者の希望にあわせて、理美容院の利用を支援している。		○		
28	○プライドを大切にした整容への支援 入居者のプライドを大切にしながら、容姿や着衣の乱れ、汚れ等に対してさりげなくカバーしている。		○		
29	○細やかな安眠のための支援 夜眠れない入居者には、１日の生活リズムを通じた対策を取るなど、入居者一人ひとりの睡眠のパターンを把握し、安眠できるよう支援している。		○		
30	○主体的な金銭管理に向けた支援 入居者本人が日常の金銭管理を行えるよう、入居者一人ひとりの状況に応じた支援をしている。		○		
31	○ホーム内での役割・楽しみごとの創出 入居者がホーム内での役割や楽しみごとを見い出せるよう、家事や小動物の世話など、一人ひとりに応じた出番づくりをしている。		○		
32	○口腔内の清潔保持 入居者の状況に応じて、口の中の汚れや臭いが生じないよう、歯磨きや入れ歯の手入れ、うがい等への支援、出血や炎症のチェックなど、口腔の清潔を日常的に支援している。		○		
33	○身体状態の変化や異常の早期発見、対応 入居者の身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように努め、その状況を記録に残している。	○			
34	○服薬の支援 入居者の体調と使用する薬の目的や副作用、用法や用量を理解しており、入居者が医師の指示に従って服薬できるように支援している。	○			
35	○緊急時の対処体制の整備 入居者のけが、骨折、発作、のど詰まり等の緊急時に職員が応急手当を行うことができるようにしており、協力医療機関や消防、警察等とあらかじめ必要な事項を取り決め、連携体制を整えている。		○		

評価者：(財)総合健康推進財団

グループホーム うきうき

認知症高齢者グループホーム外部評価結果

番号	項　　目	良くできている	できている	努力が必要	評価困難
36	○地域における入居者の生活支援 入居者が、ホームの中だけで過ごさずに、買い物や散歩、集会への参加など、積極的に地域の中で楽しめるような機会をつくっている。	○			
37	○入居者家族のホーム訪問に関する配慮 入居者の家族が気軽に訪問でき、居心地よく過ごせるよう、ホームに来やすい雰囲気をつくっている。		○		
38	○入居者家族との交流支援 入居者と家族とが交流できるように、食事づくり、散歩、外出、行事など、ホームでの活動に参加する機会をつくっている。		○		
39	○事業所としての組織的取組状況 法人代表者及び管理者は、現場の状況をよく理解して、職員と一体となって協力してケアサービスの向上に取り組んでいる。	○			
40	○入居者の状態に応じた職員の確保 ＧＨケアに適した資質を有する職員を採用するとともに、夜間を含め無理のない職員の勤務ローテーションを組むなど、入居者の状態や生活の流れを支援するための人員配置を確保している。		○		
41	○事故防止の対策 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態が発生した場合には、すべての職員が的確に対応できる体制を整えているとともに、再発防止対策を検討し、サービスの改善を図っている。	○			
42	○入居者家族からの意見や要望を引き出す工夫 入居者の家族が、気がかりなことや意見、要望などを気軽に伝えたり相談したりできるように、家族の面会時の声かけ、定期的な連絡等を積極的に行っている。	○			
43	○地域の人々との交流 入居者と地域の人々との交流のための取組みを行っている。		○		
44	○地域社会への貢献 認知症の理解や関わり方についての相談への対応や教室の開催、研修生やボランティア等の受入れなど、グループホーム運営上培った知識や経験、技術などを地域社会に提供している。	○			
45	○ホーム全体の雰囲気 病院の建物を改修したグループホームで、旧病院の名称が地域へ浸透しているようです。しかしながら、外観からは分からないが中へ入ると、２Ｆ・３Ｆの各ユニット毎にコミュニティーが形成され、各階が暮らしの場であるという感じを受けました。改修の為の設備投資は最小限にとどめたとのことですが、手すりの設置、床の張り替え、居室入り口の扉には危険防止と利用しやすい工夫がなされています。グループホームには珍しくトイレの数が多い点は、排泄の自立を推進される上では大きなメリットであると言えます。				
46	○総括的な評価 入居者のニーズを引き出し満足してもらうというコンセプトに基づき、心に寄り添った暖かみのあるケアの実践が入居者の穏やかな表情を引き出しているようです。介護と看護の域を共有し、各々が専門家としての特性を上手くマッチさせてケアに生かしている事は、入居者やその家族のみならず、地域住民への安心感を高めていると思います。 ヒヤリハット報告書に取り上げられた事故は、職員全員にフィードバックされ、事故防止に繋がっているようです。				
47	○優れている点 食べる事、歩く事、立つ事、座る事など人間として当たり前の身体の機能を最低限維持し、普通の生活を取り戻すために介護職、看護職が専門性を発揮している点がとても印象的です。入居者一人一人に寄り添い、見守る姿勢は真摯なものがあり、入居者の表情も穏やかです。 建物としての制約がある中で、各ユニット毎に工夫の跡が見られます。季節毎の行事や地域へ出向くなど、地域住民との交流も活発です。このようなふれ合いは認知症に対する世間の偏見を取り除く役目を担っており、また同時に入居者のその時々を楽しみ、喜びや笑顔を引き出すことにも繋がり、ホーム内での生活に変化をもたらしているといえます。実習生を受け入れたり、職員へは外部研修の機会を積極的に与えたり、職員の人材育成にも力を入れている点が高く評価されます。				
48	○努力が望まれる点 経営主体がサービス業種という点で、対人サービスにおける接遇の基本を職員各自が認識されていますが、得てして医療や介護、看護の現場では置かれている立場の違いから、慣れあいのうちに職員と入居者との間に力関係がでてくる恐れがあります。ケアの見直しと同じように、立ち止まり、振り返りながら入居者の方々との「暮らし」を支援していかれるよう望みます。				

評価者：(財)総合健康推進財団